# 澤田美喜と占領期の子どもたち

## ―エリザベス・サンダース・ホームと鴎鳴荘―

【指導教員】　アレクサンダー・ギンナン　中尾　雅之　長柄　裕美

【学　　生】　縣　若葉　井尾　佳音　鍵本　侑亜　坂本　柊野　中津　春

中山　太　村上　桃夏　山岡　泰斗　渡邉　真有

## はじめに

私たちは、「澤田美喜と占領期の子どもたち―エリザベス・サンダース・ホームと鴎鳴荘」というテーマのもと、調査を行った。【図１】の中央左寄りに写っている女性が澤田美喜（1901–1980年）であり、周りにいるのは占領期（1945–1952年）に主に外国の兵士と日本の女性の間で生まれ、遺棄された子どもたちである。この写真は、1952年に鳥取県岩美町熊井浜にある澤田家の別荘、鴎鳴荘（おうめいそう）の前の海で撮影された。美喜はこの別荘と海をとても気に入っており、自身が設立した児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームの子どもたちを毎年岩美町に連れて来てはともに夏を過ごしたのである。

【図１】岩美町熊井浜の海にて（影山写真事務所提供）

私たちは、澤田美喜がどのような人物で、どのような生涯を送ったのか、また彼女が神奈川県大磯町で設立したエリザベス・サンダース・ホームの歴史と現在、そして鳥取県岩美町にある鴎鳴荘とホームのつながりについて、日本語と英語の文献調査、地域の関係者や専門家への聞き取り、県内外での施設調査などを行った【図２】。

【図２】岩美町にある鴎鳴荘

まず、澤田美喜や占領期の歴史について知識を深めるために、美喜の自伝『黒い肌と白い心―サンダース・ホームへの道』（1963年）およびアメリカ在住のジャーナリスト青木冨貴子が著したノンフィクション作品『GHQと戦った女―沢田美喜』（2015年）を取り上げた。また、社会学者下地ローレンス吉孝による日本における人種概念についての研究書『「混血」と「日本人」―ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』（2018年）、鳥取県立公文書館が編集した『澤田廉三と美喜の時代』（2010年）、日本の英字新聞*The Japan Times*に掲載された関連記事なども参照した。

本調査を進めるに当たって授業に招いたゲストスピーカー、班として行った主な聞き取りや施設調査については表１にまとめている。

**表１　主な調査日程**

| | |
|---|---|
| ５月17日 | ゲストスピーカー<br>小山富見男さん「占領期について」 |
| ６月21日 | 鳥取県立公文書館訪問<br>講義　伊藤康さん「澤田廉三について」 |
| ６月28日 | 鴎鳴荘　現地調査（１回目）<br>いわみガイドクラブ　油浅郁夫さん案内 |
| ９月28日 | 鴎鳴荘　現地調査（２回目）<br>いわみガイドクラブ　油浅郁夫さん案内 |
| 12月７日 | 神奈川県内調査（１日目）<br>１．エリザベス・サンダース・ホームOB会<br>岡村正男副会長への聞き取り<br>２．聖ステパノ学園視察（佐藤紀明事務長案内）<br>３．澤田美喜記念館視察（西田恵子館長案内）<br>４．エリザベス・サンダース・ホーム<br>山田和信施設長への聞き取り<br>（同行ガイド：武井久江さん） |
| 12月８日 | 神奈川県内調査（２日目）<br>１．横浜都市発展記念館訪問<br>講義　西村健さん「戦後横浜について」<br>２．聖母愛児園訪問<br>工藤則光事務長への聞き取り |

## 澤田美喜の生涯

澤田美喜は1901年、三菱財閥創始者岩崎弥太郎の長男、岩崎久弥と寧子の長女として東京市本郷区（現在の東京都文京区）に誕生し、恵まれた子ども時代を過ごした。幼い頃から海外やキリスト教に関心を持ち、1922年に鳥取県岩美町出身の外交官、澤田廉三（1888–1970年）と結婚した【図３】。クリスチャンの廉三との結婚をきっかけにキリスト教に改宗し、外交官夫人として海外を飛び回る生活を送るようになった。２人の間には子どもが４人（男３人、女１人）生まれた。結婚した後、廉三の地元岩美町浦富に里帰りした際に、美喜は熊井浜の海岸に魅了され、1937年にそこに別荘を建設した。それが本

調査の重要な拠点のひとつとなる鴎鳴荘である。

【図３】澤田美喜と廉三（影山写真事務所提供）

第二次大戦後、財閥解体の影響で岩崎家は大きな打撃を受けた。その苦境のなか、美喜は、戦後直後占領軍の兵士と日本の女性の間に生まれ、遺棄された子どもたちを保護し育てるために、1948年、神奈川県大磯町に児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームを設立した【図４】。以来、1980年にスペインのマヨルカ島で亡くなるまで、ホームの子どもたちのために尽力したのである。

【図４】大磯町にあるエリザベス・サンダース・ホーム

美喜と鳥取県を結び付けた人物である澤田廉三について学ぶために、私たちは、先述の『澤田廉三と美喜の時代』を編集した鳥取県立公文書館を訪問した。そこで、専門員の伊藤康さんより廉三について詳しくお話を聞かせて頂いた【図５】。廉三は、鳥取教会で洗礼を受け、宣教師から英語を学んだ。1914年に東京帝国大学法科大学フランス法律科を卒業後、外交官の試験に合格して外務省に入省した。外交官としては、フランス、アルゼンチン、中国、イギリス、アメリカなどに赴任し、1939年にフランスの特命全権大使、1943年にはビルマの特命全権大使となった。また、1953年には日本の初代国連代表部大使となり、日本の国連加盟の立て役者となった。

【図５】鳥取県立公文書館の伊藤さんによる講義

廉三と結婚したことで美喜は様々な国に滞在することになり、海外で多くの友人に恵まれた。その一人にジョセフィン・ベイカー（Josephine Baker、1906–1975年）という歌手・女優がいる。彼女は、1906年にアメリカ・ミズーリ州でアフリカ系アメリカ人の母とスペイン人の父の間に生まれ、1937年にフランス国籍を取得した。フランスでは「黒いヴィーナス」と称賛されたが、アメリカでは黒人差別がひどく、ヨーロッパで成功した彼女でさえも扱いが変わることはなかった。ニューヨークのホテルでは、宿泊を断られるほどであった。さらに、アメリカでの公演の際、他のダンサーから差別的な発言を受けた彼女は、「あなたたちのその白い皮膚の下には黒い心がある。そして、私の黒い皮膚の下にはまっ白い心がある」と叫んだという（『黒い肌と白い心』、129頁）。この言葉は、美喜の自伝のタイトルになるほど印象深いものであり、この出来事は美喜にとって差別という現実を思い知らされるものとなった。ジョセフィン・ベイカーはそんな現実に、真正面から立ち向かった。このことは美喜がエリザベス・サンダース・ホームを設立するに至る道筋のひとつになった。

## 第二次世界大戦と占領期

エリザベス・サンダース・ホームの設立の背景には、戦争と占領期がある。私たちは占領期について理解を深めるために、新鳥取県史編纂委員の小山富見男さんを大学に招き、満州事変、日中戦争、太平洋戦争をはじめ戦後における連合国による日本占領の歴史についてお話を

伺った【図６】。1945年８月14日、日本は連合国軍からの降伏要求であったポツダム宣言を受諾した。その翌日、玉音放送により日本が第二次世界大戦で降伏したことが国民に伝えられ、９月２日に政府は降伏文書に調印したのである。

【図６】新鳥取県史編纂委員の小山さんによる講義

日本が受諾したポツダム宣言の中には、言論・宗教・思想の自由や基本的人権を尊重することが含まれており、それを実行するための政策がとられた。連合国の対日方針は様々で、例えば、陸海軍や特高警察の解体、戦犯の逮捕、軍国主義者の公職追放などが行われ、非軍事化が進んだ。また、教育については、政教分離や軍国主義教育の廃止などが行われた。

終戦直後の日本では、多くの人が貧しい生活を強いられ、食糧難や住宅難に陥る人が続出し、親を戦争で失った戦災孤児が苦しい路上生活を送っていた。そんな中、占領軍の兵士と日本の女性の間に次々と誕生し始めたいわゆる「混血児」も苦しい生活を送ることになった。「混血児」とは、異なる人種の親の間で生まれた子どものことである。現代ではあまり耳にする言葉ではないが、当時の政府やマスコミではこの言葉が頻繁に使用されていた。戦後の貧しさゆえの売春、占領軍基地で働く女性と占領兵との親密な関係、あるいは強姦などによって多くの子どもが生まれた。経済的理由や周囲からの偏見によって子どもを育てられなくなった母親は、子どもを遺棄したり施設へ預けたりした。肌の色など外見的特徴に対する偏見に加えて、戦時中に敵だった国の子どもであるとして差別を受けた。

では、このような子どもたちのために占領軍と日本政府はどのように対応したのだろうか。当時、連合国軍最高司令官本部（General Headquarters、略称GHQ）の公衆衛生福祉局のクロフォード・F・サムス局長により、いわゆる「混血孤児」を保護するための公的施設の設立が禁止されていたため、事実上彼らは野放し状態となっていた。日本政府もGHQの意向を受け、「混血児」の保護や養育は篤志家、宗教や社会福祉団体に任せていた。つまり、双方とも保護する責任を拒んだということである。全国で「混血児」と呼ばれた子どもの数が最も多かったのは神奈川県であった。戦後における神奈川県の状況を知るために、横浜を中心とした歴史に関する展示と研究を行っている横浜都市発展記念館を訪問し、調査研究員の西村健さんより当時の「混血児」に関するお話を伺った【図７】。当時、横浜はGHQの拠点であり、多くの占領軍兵士が駐屯していた。厚生省児童局が実施した1952年３月の「混血児」の実数調査記録によると、全国の2,983人のうち神奈川県では1,041人が確認され、その中で268人が保護されたという。

【図７】横浜都市発展記念館の西村さんによる講義

## エリザベス・サンダース・ホーム

次に、なぜ澤田美喜がエリザベス・サンダース・ホームを設立するに至ったのかについて確認する。ある時、電車に乗っていた美喜は、警察に嫌疑をかけられた。美喜が腰かけていた真上の網棚に紫色の風呂敷包みがあり、警官はその風呂敷包みに目を向け、誰の物なのかと聞き始めた。しかし、誰一人も名乗り上げなかったため、警察は不審に思いながら風呂敷包みを手に取ると、油紙に包まれた赤ん坊の裸の死体が現れた。美喜は、自伝の中でその赤ん坊の死体を見た時、悲しさとも悔しさとも言えない複雑な感情が込み上げ、身体が震えていたと回想している。警察はその赤ん坊の死体を見て、たまたま近くにいた美喜に嫌疑をかけ罵倒した。それに対して、美喜は次のように叫んで抗議したという。

だれか、この列車にお医者さんが乗っていたら、すぐにここによんでください。そして、私を調べて下

さい。いますぐにでも私は裸になりましょう。さあ、私が生後数日の子を産んだか、産まないか、ここで診察して下さい。

『黒い肌と白い心』、157～158頁

こうして謂れのない嫌疑を払いのけた美喜だったが、この直後、神の声が次のように囁くのを聞いたと述べている。

もしお前が、たとえいっときでもこの子の母とされたのなら、なぜ日本国中のこうした子どもたちのために、その母になってやれないのか……。

158～159頁

この啓示は、エリザベス・サンダース・ホームを設立して子どもたちを守るという美喜の半生を決定づける瞬間となった。

美喜は、ホームの子どもたちを優しくも、厳しく育てた。昼はオニババ、夜はマリアと言われ、昼間は胸を張るが、夜になるとその重みに耐えかねて涙を流しながら祈り明かしたことが幾度もあった。一生懸命に子どもたちを育てた美喜は「ママちゃま」と呼ばれ、美喜とホームの子どもたちは本当の親子のようであった。彼女は、世の中の逆境に負けず生きていけるようにと、子どもたちに独立心を植え付けるしつけを行った。

GHQにより財産を接収された美喜は、子どもたちのために身を粉にして尽力した。自分の大切な持ち物を売って、子どもたちのミルク代や食事代に充て、実子よりホームの子どもたちの養育を優先した。また、卒業生の相談に乗ったり、会いに行ったりと、いつになっても我が子のようにホームの子どもたちを愛し続けた。ある時、ニューヨークの教会から高額の支援金が贈られる話があったが、美喜の活動に反感を持つ者の流言によりその話は破綻してしまう。そのため、美喜はアメリカへ行き講演会を開き資金集めに奮闘した。ホームの卒業生の方によると、朝早くにお金の工面のために出て行き、夜遅くに帰ってくる姿をよく見たそうだ。また、昭和天皇がエリザベス・サンダース・ホームを訪問された際、美喜はお金が増えるわけではないという理由から、天皇に会うこともなく講演会に出かけたというエピソードも伺った。

美喜は多くの人からの助けを受けながらホームの運営に努めた。その一人に、ポール・ラッシュ（Paul Rusch、1897-1979年）という人物がいる【図８】。ラッシュは戦前から澤田夫妻の友人であり、ニューヨークおよび日本で交流を深めた。戦後、GHQのオフィサーとして再来日してからも親しい関係を続け、エリザベス・サンダース・ホームの設立と運営に大いに協力した。

【図８】ポール・ラッシュと澤田美喜
（ポール・ラッシュ記念館提供）

地域の激しい差別を受け、エリザベス・サンダース・ホームの子どもたちは、就学する年齢になっても一般の学校に入学させることが難しかった。そのため、美喜はホームの敷地内に聖ステパノ学園という学校を設立した。1953年に小学校を開設し、美喜が初代校長を務め、1959年には中学校も開設した。1993年からは、ホームの子どもだけではなく、一般家庭からも生徒を受け入れている。私たちは、エリザベス・サンダース・ホームを訪問した際、聖ステパノ学園を事務長の佐藤紀明さんに案内して頂いた【図９】。この学校はキリスト教の精神のもとに教育を行っており、学園内には礼拝堂があり、生徒たちは１日２回の礼拝を行っている。

## 鴎鳴荘での夏

エリザベス・サンダース・ホームを訪問した際、私た

【図９】聖ステパノ学園での視察

ちはホームの子どもたちの岩美町での経験について知るために、実際に美喜と鴎鳴荘で夏を過ごしていたエリザベス・サンダース・ホームOB会の副会長である岡村正男さんにお話を伺った【図10】。岡村さんは、ホームで美喜に育てられた末っ子で、現在も鴎鳴荘で休暇を過ごすことがあるという。

【図10】ホームOB会の岡村副会長への聞き取り

1950年代から70年代の終わりまで、エリザベス・サンダース・ホームの子どもたちは、毎年学校の終業式の翌日から始業式の前日まで鳥取県岩美町に行き、夏休みを鴎鳴荘で過ごした。岡村さんによると、基本的には子ども全員が連れて行ってもらえたが、「小学校２年生以下」「おねしょする子」「やんちゃすぎる子」「問題を起こした子」は行けなかった。鴎鳴荘では大磯のホームで味わえない自然を満喫し、暗くなってくると夕日を見ながら花火をした。また、スイカを食べることも子どもたちの楽しみであったという【図11】。

【図11】鴎鳴荘でスイカを楽しむホームの子どもたち
（影山写真事務所提供）

エリザベス・サンダース・ホームのOB会には百数名が在籍しており、以前は鴎鳴荘でもOB会の集まりが開かれていたが、現在は主に神奈川県で活動している。

## 澤田美喜の三つの功績

続いて、私たちはホームの敷地内にある澤田美喜記念館を訪問した【図12】。澤田美喜記念館は1988年４月19日に開設され、2014年３月から一般公開されている。建物の外観は、ノアの方舟をイメージしており、１階には展示室、２階には礼拝堂がある。記念館には主に、美喜が集めた隠れキリシタン遺物コレクションと澤田美喜に関連する資料が展示されている。また、展示室の奥に納骨堂があり、エリザベス・サンダース・ホームで幼くして亡くなった子どもの骨と遺影が納められている。

【図12】大磯町にある澤田美喜記念館

私たちは、記念館の西田恵子館長から澤田美喜の三つの功績についてお話を伺った【図13】。一つ目は、社会福祉事業としてのエリザベス・サンダース・ホームの設立。二つ目は、教育者としての聖ステパノ学園の設立。そして三つ目は、文化事業としての隠れキリシタン遺物の蒐集である。現在、隠れキリシタン遺物は874点あるが、かつては1,000点以上あったそうだ。美喜は自ら隠れキリシタンの子孫のもとを訪れ、信頼関係を築き貴重な遺物を集めた。美喜にとってキリスト教はホームの子どもたちを育てる上で精神的支えとなっていた。ホーム運営と隠れキリシタン遺物蒐集の根底には、抑圧された

者に対する美喜の眼差しがあったのである。

【図13】澤田美喜記念館での視察

## その他の児童養護施設

戦後、占領軍の兵士と日本の女性の間に生まれ、遺棄された子どもたちの問題に対応したのは、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームだけではなかった。いわゆる「混血孤児」を保護した国内の福祉関係施設としては、北海道に天使之園、宮城県に仙台天使園、大分県に小百合愛児園、神奈川県に聖母愛児園、そしてエリザベス・サンダース・ホームがあった。私たちは、神奈川県の聖母愛児園にも訪問し、親からの委託書や里親の推薦状、子どもが施設に預けられた経緯を記した書類など、施設に保存された占領期の貴重な資料を閲覧させて頂いた【図14】。

【図14】聖母愛児園での資料調査

聖母愛児園は1946年に横浜市中区の一般病院の玄関先に子どもが放置されていたことをきっかけに設立された。孤児を受け入れたことが知られると、警察官が駅や道端に置き去りにされた「混血孤児」を連れてきたり、様々な理由で子どもを育てることの出来なかった母親たちが赤ん坊を預けに来たりするようになった。この状況に対応するために、欧米諸国出身のシスターたちが養育を開始した【図15】。聖母愛児園では、1946年８月時点の受け入れ人数は22名であったが、翌年８月にはその数は136名にまで増加した。以後も聖母愛児園は、多くの子どもを受け入れたが、中には劣悪な環境に放置されていたり、当時流行していた伝染病を患っていたり、早産のために生まれつき貧弱であった子どももいた。このような背景から、保護されて間もなく亡くなる子どもも少なくなかった。

【図15】1950年代の聖母愛児園（聖母愛児園提供）

聖母愛児園が位置する横浜市は、港町であり且つ占領軍の拠点であったことから、多くの外国人が施設を訪れた。彼らは施設の子どもたちと交流しただけでなく、食事の支援をしたり、プレゼントを贈ったりもした。中には、自分たちが気に入った子どもを養子として引き取る人も現れ、1950年から60年の10年間にアメリカ人家庭との間に約250の養子縁組が成立した。

## 各施設の現在

エリザベス・サンダース・ホームは現在も児童養護施設として子どもの保護を続けている。私たちは、ホームの社会的養護の現状について施設長の山田和信さんへの聞き取りを行った【図16】。山田さんによると、公的保護の要因は様々であり、親の死亡、児童虐待、生活困窮、金銭問題、薬物依存などによって保護者のいない児童、あるいは監護させることが適切でない児童は社会的養育が必要となる。エリザベス・サンダース・ホームでは、施設での養護に加えて、退所後の支援として、キャリアサポート、大学進学支援や職場、住居訪問なども行っている。

【図16】ホームの山田施設長への聞き取り

聖母愛児園も現在、児童養護施設として子どもの社会的養護を続けている。私たちは、聖母愛児園に訪れた際、事務長の工藤則光さんに児童養護施設に対する社会的認識についてお話を伺った【図17】。工藤さんは、全ての子どもが家庭の事情で児童養護施設に入所する可能性があることを指摘されていた。私たちが将来、親になったとしても事故や病気、災害などで命を落とすかもしれないし、経済的に破綻するかもしれない。したがって、児童養護施設は私たちと無関係な場所ではなく、いざという時に代わりに子育てを担ってくれる福祉施設なのである。

【図17】　聖母愛児園の工藤事務長への聞き取り

また、占領期に聖母愛児園が受け入れたいわゆる「混血孤児」について、工藤さんは養子縁組で海外に渡った元園児の大人が、現在でもルーツ探しのために聖母愛児園に問い合わせをしたり、来日して施設を訪ねたりしているとおっしゃっていた。

鳥取県にある鴎鳴荘は現在、岩美町でガイド活動を行っている油浅郁夫さんが管理されており、今もエリザベス・サンダース・ホームの卒業生が訪れる場所となっている。また、地元の中学生や高校生も学校の学びの一環として鴎鳴荘を訪問する場合がある。私たちは、２回訪問させて頂き、現地調査を行った。今なおホームの卒業生と交流がある油浅さんからは、文献では学べない貴重なお話を伺うことができた【図18】。

【図18】　岩美町熊井浜での聞き取り調査

鴎鳴荘への道は自然のままで、途中にはマムシ注意などの看板があり、別荘の前に広がる熊井浜はプライベートビーチのようになっている。鴎鳴荘の１階には、ホームの子どもたちが勉強をしたり、ご飯を食べたり、遊んだりしていた大きな部屋がある。その奥には美喜の部屋があり、近くの壁と柱にはホームの卒業生が鴎鳴荘を訪れた際の訪問記録が書かれている。当時、２階は寝室と勉強部屋として使用されていた。今でもホームの子どもたちが使っていた壁に収納できる折り畳み式の机が残っている。

岩美町浦富には、澤田家のお墓がある。そこには、澤田廉三、美喜、長男の信一、三男の晃が眠っている。廉三が生前、海の見える場所で眠りたいという言葉を残していたため、この地が選ばれたのである。

## まとめ

以上の調査を通して、私たちは澤田美喜が戦後に設立した児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームとその子どもたちの歴史と現在、そして鳥取県岩美町にある澤田家の別荘、鴎鳴荘とホームのつながりについて理解を深めることができた。今まで知らなかった歴史を学んだだけではなく、それが現在も身近なところで生きているということが分かった。そして、私たちが普段あまり考えない人種差別の問題や児童養護施設が担う役割について、認識を高める必要性を実感した。

本調査を行うにあたってご協力いただいた方々にお礼を申し上げることで締めくくりとする。

**【ご協力いただいた皆様】**

伊藤康、岡村正男、影山智洋、工藤則光、小山富見男、佐藤紀明、武井仁、武井久江、西田恵子、西村健、秦英水子、山田和信、油浅郁夫

（敬称略・50音順）

**【参考文献】**

青木冨貴子『GHQと戦った女―沢田美喜』新潮文庫、2018年

沢田美喜『黒い肌と白い心―サンダース・ホームへの道』ほるぷ、1980年（初版1963年）

下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」―ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社、2018年

鳥取県立公文書館編『澤田廉三と美喜の時代』鳥取県、2010年

横浜都市発展記念館編『戦後横浜に生きる―奥村泰宏・常盤とよ子写真展』横浜市ふるさと歴史財団、2018年

横浜都市発展記念館編『焼け跡に手を差しのべて―戦後復興と救済の軌跡』横浜市ふるさと歴史財団、2016年

Mariko Kato, “Occupation orphan traces roots.” *The Japan Times*, June 6, 2009.

# Miki Sawada and the Children of the Occupation:
## Elizabeth Saunders Home and Omeiso

**Instructors**

Alexander Ginnan
Masayuki Nakao
Hiromi Nagara

**Students**

Wakaba Agata
Kanon Inoo
Yua Kagimoto
Shuya Sakamoto
Haru Nakatsu
Futoshi Nakayama
Momoka Murakami
Taito Yamaoka
Mayu Watanabe

**Overview**

Second year students at the Faculty of Regional Sciences are required to take a course entitled *Regional Survey Project* in which they spend a year researching a topic in small groups under the guidance of a team of instructors. This year, nine students chose the topic *Miki Sawada and the Children of the Occupation*: *Elizabeth Saunders Home and Omeiso*. The students researched about the life of Miki Sawada (1901–1980) as well as the foster home Elizabeth Saunders Home which she established for children born between foreign soldiers and Japanese women during the Allied occupation of Japan (1945–1952) following World War II. Students also did research on the connection between the Elizabeth Saunders Home in Oiso, Kanagawa, and the Sawada family cottage Omeiso in Iwami, Tottori.

**Texts**

As part of this research project, students referred to the following main texts:

Aoki, Fukiko. *GHQ to Tatakatta Onna*: *Sawada Miki*. 2015

Sawada, Miki. *Kuroi Hada to Shiroi Kokoro*: *Sandazu Homu he no Michi*. 1963/1980

Shimoji, Lawrence Yoshitaka. *Konketsu to Nihonjin*: *Hafu*, *Daburu*, *Mikkusu no Shakaishi*. 2018

Tottori Prefecture ed. *Sawada Renzo to Miki no Jidai*. 2010

**Research Activities**

In addition to reading the above texts, students attended special lectures, conducted interviews, and performed numerous site visits. The main activities are as follows:

| | |
|---|---|
| May 17th | Guest Lecture: Mr. Koyama<br>Topic: The Occupation Period |
| June 21st | Lecture by Mr. Ito at Tottori Prefectural Archives<br>Topic: Renzo Sawada |
| June 28th | Site Visit: Omeiso<br>Guide: Mr. Yuasa |
| Sept 28th | Site Visit: Omeiso<br>Guide: Mr. Yuasa |
| Dec. 7th | Kanagawa Visit (Day 1)<br>1. Elizabeth Saunders Home<br>Interview with Mr. Okamura<br>2. St. Stephan's School (Mr. Sato)<br>3. Miki Sawada Memorial Museum (Ms. Nishida)<br>4. Elizabeth Saunders Home<br>Interview with Mr. Yamada<br>(Guide: Ms. Takei) |
| Dec. 8th | Kanagawa Visit (Day 2)<br>1. Lecture by Mr. Nishimura at Museum of Yokohama Urban History<br>Topic: Postwar Yokohama<br>2. Seiboaijien<br>Interview with Mr. Kudo |

**Acknowledgements**

The students and instructors would like to thank all the people who supported this project.